
彼等のように自由になれるといいな

杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼等のように自由になれるといいな

【Nコード】

N3217BA

【作者名】

杏

【あらすじ】

大会から1週間後、突然旅に出る、ある少年とその親の影響で旅に出始める、

ブローグ マツバの苦悩と新たな旅立ち

大会を終えた1週間後、久しぶりにジムリーダーとして活動を開始したマツバ、

やはり大会が終わったばかりと言う事でマスコミが押しかけてくるがジムの仕掛けでなかなかマツバの所へたどり着けない、

マツバはそれを見ていた、いわゆる高みの見物、

また一人の挑戦者が来る、

リーフと名乗った少女、ではなく少年、白い髪の少女と共に来ていた、

彼はとんでもない強さで歯が立たなかった、

取り敢えずバツジを渡すと少年と少女は喜びながらジムを後にした、

マツバは驚きの余り何も言えなかった、

*

マツバは家に帰って悩んだ、

旅をするかを、あの楽しそうな少年を見ると無性^{むじょうせい}に旅したくなるのだ、

だがジムリーダーという仕事があるのも知っている、

＊

「誰だ、お前は。」

色がハッキリしないポケモンが目の前にいる、

どこか幻想的な世界、浮いてるような感じもする、
またギラティナと出会った世界とも違う、

「……………俺は、アルセウス、かもな。」

「かも？ どう見たってアルセウスじゃないか。」

アルセウスが話を外らす、

「……………お前は、旅したいと思ってるのだろう。」

「ああ、だがジムリーダーという仕事があつてだな。」

「……………チャンスをやろう、お前が旅するチャンスを。」

マツバは悩む、しかしこの空間だと集中できない、
まるで催眠術にでもかけられてる様な感覚だった、

ん？ 催眠術？ 僕は、催眠術でもかけられてるのか？

「……………断る、それなら自分でやろうと思えばできるしな。」

アルセウスはしばらくマツバを見つめていた、
そして不敵な笑みを浮かべる、

「フッフ、合格だ、もう合う事はないだろう。」

そこで目が覚めた、

不思議な夢、自分の夢を決めている感じがした、
珍しく見た夢を覚えている、

*

今日も挑戦者を待つ、

ただ今日見た夢のせいでジム戦に集中できない、
いつもより負け数が多かった、

いわゆる煩惱である、今日は早めに帰って夢の事を考える事にした、

自分は旅に出たいのか、ここにとどまりたいのか、

*

翌日、

今日も挑戦者を待つ、

挑戦者つて、旅してるんだよな、そーいやグリーンも旅してるんだ
ったけな、

・・・ダメだ、ここにいなければ、

だが挑戦者を見ると羨ましくなる、
自由に旅してる姿を見ると、

また一人、マグマラシを挑戦者が来る、

あの少年よりかなり元気のいい少年だ、

銀次郎と名乗る少年、

＊
～

何とか勝った、いつもならこの程度のトレーナーに勝てるのに、

こうして1日が終わる、

マツバの心は疲れきっていた、

＊

スズねの小道

マツバはここで日頃の疲れをとっていた、

ただあのこと、が気になる、

もう気にしないと思ってても気になってしまっ、

*

翌日、

今日も挑戦者を待つ、

そしてミドリの髪の男性が来た、

軽々と仕掛けを突破すると勿論なんだが挑戦してきた、

*
)

バトルが終わった瞬間ミドリの髪の男性は言った、

「お前、何か悩んでるな、俺でよかったら言ってみろ。」

「え、でも、迷惑かけるわけには……。」

「俺に迷惑なんてない、言ってみろ。」

マツバは男性に自分が旅していいのか、を聞いた、
男性はしばらく悩むとマツバの質問に答えた、

「……実は俺もカントーでジムリーダーしてた時期があつてな、旅したいと思ってたんだが離れる訳にはいかないと呪縛の縛られてたんだがある今はハウエンの四天王なんだが自由に放浪してるらしくて俺も自由に放浪していいと思って思い切ってジムリーダーを辞めたんだ、まあ、今は弟子のエリカがジムリーダーしてるけどな。」

「なるほど、有難う御座います。」

「じゃあな、お前の人生楽しめよ！」

男性は去って行った、

一気にマツバの疲れは取れた、

すぐにマツバはリーグ本部に向かった、
相棒のゲンガーと共に、

*

リーグ本部、

自分のトレーナーカードを読み込ませて中に入った、

受付に用件を行って客間にいるようにと言われた、

数分するとチャンピオンのワタルが焦った顔で来た、

*

数時間後、

ワタルを説得してジムリーダーを辞めた、

これからマツバの旅が始まる、

一つ マサラのポケモンマスターとの再会（前書き）

べ、別に毎日更新始めた訳じゃないからねっ！

一つ マサラのポケモンマスターとの再会

マツバは適当に決めてシンオウに行ってみる事にした、

早速アサギシティの船に乗った、

自分の部屋に荷物を置くと船の中をふらつき始めた、

「これがシンオウ行きの船か、カントー行きの船とは全然違うな。」
中には家族連れの人やテレビ局の人に

赤い帽子の青年・・・・・・・・ん？ 赤い帽子の青年？

マツバはその赤い帽子の青年の所へ行って話しかけた、

「もしかして君はレッド？・・・・」

「ええ、そうですけど、貴方はマツバさんですね、お久しぶりです。」

しばらく話してる内に意気投合してしまったようで一緒のシンオウをまわる事になった、

*

翌日、

彼等は船を降りた、

ここはマサゴタウン付近の港、

まずはレッドの用事を済ませるということでナナカマド博士の研究所に向かった、

*

研究所に入ると紫にシルクハット、見覚えのある顔、別の意味でマツバは身震いした、

もう一人、緑の髪に男性が、彼はジョージのようだ、

レッドはナナカマド博士に軽く一礼して挨拶すると質問した、

「博士、そちらの方は。」

「ああ、コイツはな……………」

「どうも もす です、モスギスです、覚えてください、じゃないといつかテスト用紙にひっそりと忍び込みます。」

「俺の名前は——」

「ジョージだ、彼はまだまともなほうだ。」

「……………ぐすん。」

「……………変わった人達ですね。」

「ああ、そうだな、で 本題なんだが……。」

〔裏の情報〕

話の内容はこの地方に最近ゲーチスやらロケット団やらターナーやらあらゆる悪の組織やそのボスがこの地方に出没してるようだ、

マツバは信頼できるから聴いてもいいそうだ、

「なるほど、それを俺達で退治するという事ですな。」

「その前に下調べしてほしい、何もしてないと捕まえても意味がないからな。」

「かしこまりました。」

*

コウキの家、

何故かナナカマド博士はコウキの家に泊まるようにと言った、

「わあ、スターがこんなに、どうぞこちらです。」

「あら、ジムリーダーの方達と……、その紫の方はどちら様ですか？」

「え！ モスギスさんの事知らないんですか、余りのショックで立ち直れない……、イツツイステイングタイムう。」

コウキの母は困り果てている、

ジョージは訳を説明してコウキの母は納得した、

*

夜、

コウキの部屋でコウキを含めて会議が始まった、

が、もしかしたらゲーチスのダークトリニティがいるかもしれないのでまず確認してから会議が始まった、

*

翌日、

皆夜遅くまで会議してたため思いっきり寝坊している、

マツバを除いて、

「コウキ君のお母さん、おはようございます。」

「あら、おはよう、夜遅くまで偉いわねえ。」

「いえいえ、まともにできませんでしたよ、それより皆起こさないんですか？」

「そうなの、ちょっと起こしてくる。」

コウキの母は2階に行くとお玉でフライパンを叩くというある意味お馴染みの光景がある、

*

昼頃、

また研究所に集まっていた、

「どうだ、何か進展はあったか。」

「いえ、全く。」

その時近くの住民が突然研究所にきて焦った口調で言った、

「た、ターナーがいます！」

「なにい！」

ジョージは声を荒げた、

二つ 早とちりはいけません(前書き)

今回は短めです、

二つ 早とちりはいけません

ジョージは研究所を飛び出した、

この町を駆け回ってる途中で野次馬を見つけた、
その中に入ってくと、

「だから！ ターナーって誰だよ！」

住民の罵声が飛ぶ、

ジョージの後を追いかけてたマツバはやっと追いついた、

そしてジョージの発言に住民が静まり返った、
ジョージはターナと【ポケットモンスターベガ参照】いろいろあつ
たため有名

「こいつはあああああ！！！！！！！！！」

「こいつは？」

ざわざわ ざわざわ

ざわざわ ざわざわ

「誰だあああああ????????!!」

「……………」

拳句の果てにはジョージにも罵声が、
まだターナーとグルだったのかとかそんなん、

気づいたらただの赤い髪の少年はいなくなっていた、

「げ、俺はジムリーダーだしなあ、前だったらけちらせたんだが・
・・・。」

マツバはジョージの肩に手を置いて言った、

「ジョージ、実は俺、今はジムリーダーじゃないんだ。」

ジョージは余りのショックで少し固まった、

「んな馬鹿なああああああああ！！！！！！」

町中にジョージの声が鳴り響いた、

その後マツバはゲンガーやヨノワールで野次馬を追い払った、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3217ba/>

彼等のように自由になれるといいな

2012年1月13日20時01分発行